

はくさん

第3巻 第2号



ヒノキガサ

わたくしたちの身边には、画一的な工業製品がほとんどではないでしょうか。そのためかどうか、手づくりのあじわいを求めて、昨今は、民具がブームだといえます。

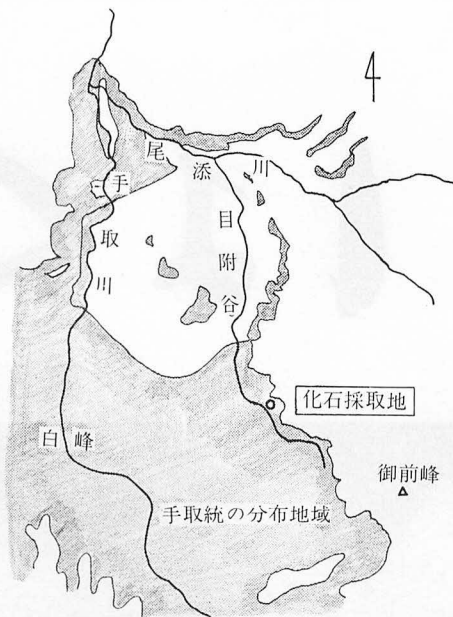
写真のヒノキガサもその一つです。これにはいくつかの種類がありますが、つくり方はほぼ同じで、檜の削り片（ヒンナといいます）を“カサブタ”という台のうえで一つ一つ丹念に綱代にくんでつくる組笠の一種です。それには、“カサブタ”をはじめ小刃など、約5種類の道具が使用されます。

白山麓の尾口村深瀬区では、400年程もまえから、こうしたヒノキガサを、おもに女性があんできました。大正の頃は深瀬区64戸全部がつくっていたといえます。そのため、カサつくり用いる“カサブタ”などは、かつては嫁入り道具の中に数えあげられていたほどでした。

しかし、手づくりの美しさをもつヒノキガサづくりも、手取川ダム計画による深瀬区の人々の集団移住で、長い伝統の消滅が心配されていました。でも、新しい移住地での製造がはじめるようで、この心配は解消されそうです。

（写真 宇野文夫，文 松山利夫）

目附谷上流での化石採集



この夏（7月30日～8月5日）、金沢大学教養部地学教室の先生方と共同で、目附谷上流、紅滝付近のガレで手取統の植物化石の採集を行いました。



新しく、直立樹幹が4本見つかりました



3 kg ハンマーを使っでの奮闘



一仕事終って、キャンプでの夕食時



採集化石の一部、右がポドザミーテス、左がニルソニア

目附谷(めっこだに)の“二重ノ滝”(ニジクタキ)

松尾秀邦

国土地理院発行の1/25,000地形図“白峰”図幅を展げると、目附谷の本流に滝の印が2箇所ついている。上流に存在するのが紅滝、下流の滝には名が付いていない。ここで結論をいわせて貰うと、紅滝の位置には滝はなく、下流の無名の滝の位置に“二重ノ滝(ニジクタキ)”が存在する。

もっとも、1/50,000地形図“白峰”図幅では、本流の滝は1箇所、紅滝の位置にそれがある、紅の字のルビに“にじ”がふつてある。

この紅滝なるものは、“二重ノ滝”が“ニジクタキ”、更に転化して“ニジタキ”となり、漢字をあてる時に、虫と糸を取違えたという事になる。地形図作成に際し、地名は漢字で書くという規則でもあるならば、漢字をあてる必要があるが、いらざる事を行ったが為に……の感がある。

そこで、“二重ノ滝(ニジクタキ)”であるが、この名称は形態から名付けられたのである。この滝は二列並んで落ちていた、もし片方が大きければ夫婦滝(めおとだき)になっていたであろう。

しかし、筆者は当センターの研究報告書に投稿した時、ニジクタキが二重ノ滝になっていた事を確かめず、他の滝に名称を与えてしまった。ここに間違いを訂正し、配慮の至らなかった事を深く御詫びする次第である。

筆者が今までに三回見て来た目付谷本流の“二重ノ滝”は渇水期のためか、1本のみがどうどうと落下していた。今回のように、例年になく梅雨の上りが遅れ、増水している時の滝を見たのであれば、“成程、ニジクタキは

この滝だ”と判断したに違いない。尾添の人々の口伝を素直に受けておけばよかったのにと後悔することしきりである。

何故、1本のみと見えたのであろうか、これは渇水という条件もさることながら、昭和9年の大出水が原因ではなかろうかと思うのである。尾添の人々や昭和6年夏に目付谷に入り、化石を採集された長尾捨一さんに伺えば簡単に判明することなのであるが、恐らく、これ等の方々は堂々たる二筋に落下する滝を御覧になっていたに違いないと思うのである。今日のように本流の部分の下刻が左片側よりも大きく、二筋の滝のバランスを崩したのは滝を見ていると、昭和9年夏の出水に外ならぬと判明するのである。

何故ならば、右岸側には大きな谷筋が入っていて本流となっており、左岸側よりも出水



の際の影響を大きくこうむり、その結果は滝の落ち口にアンバランスを生じ、本流側の崩れが大きかったことによるのである。

とに角、今回の目付谷化石採集で入山し、例年になく水量が豊富であったお陰で、滝が二筋にある“二重ノ滝”を確かめた。事実、二週間程の間に水量が減って来ると、右岸側、本流の堂々たる落ちぶりに対して、他方の貧弱さは“無”に等しい落ちぶりをしめた。

滝の位置については、右岸側に大きく入る谷筋が滝の上流に存在することから、1/25,000地形図の無名の滝がそれにあたることには自信があったが、念の為に、金沢大学山岳部の西村君に本流を＝上って貰って、果して本流のこの滝の上流に、地形図に載せられる程の立派な滝が存在するのか否か確かめて貰った。

その結果は、昌頭に述べた様に“紅滝”の位置に滝はなく、無名の滝こそ“二重ノ滝(ニジタキ)”であることが確かめられた。

ニジタキを認めることは、手取統植物群の一員に“紅滝フローラ”が用いられていることにも影響があるのであって、この植物群

の名＝を“目付谷フローラ”と改称しなければなるまい。何故“ニジタキフローラ”と改名しないかという、河川の侵蝕作用、下刻の結果によって滝の後退現象が生じ、何れの日にかは、滝は消滅する運命にあり、後退のあとには“＝(ドロ)”という峡谷を残すことになるからである。

それにしても、目付谷の本流の立派な滝の名称は、尾添の人々によって云い伝えられて来た“二重ノ滝(ニジタキ)”が本名であって、1/25,000地形図上から紅滝を消し、無名の滝の位置に“ニジタキ”と記入されるべきである。従って1/50,000地形図上には紅滝を取り、新しく下流の位置にニジタキを追加するというのである。

なお、筆者が“二重ノ滝”と判断したナル谷(鳴谷と漢字をあてるのは間違いで、ナルイタニ、即ちゆるやかな谷の意をもつ谷なのである)の合流点から望める滝は無名の滝で、地形図には未記載の滝であることを付加し、再度、“ニジタキ”に対する判断の汗潤さを御詫びする。

目附谷の声のブッポウソウ

“はくさん”2巻2号に“白山の声のブッポウソウ”を載せて頂いた時に、所員の水野さんから“中宮のセンター裏山で毎晩鳴いている”と伺った。そこで、センターの展示室の化石標本が貧弱であるとの風群も耳にしていたので、6月に入った水曜日、休館日とは知らずに伺った。標本の方は世評にたがわずという処であって、コノハヅクの方も今日此頃はサッパリ聞かれないとの事で、二重のガッカリを喫した次第であった。

しかし、標本の方は“目附谷”で採集すれ

ば、何とかなるというわけで、昭和49年7月下旬に目附谷に入ることを決めた。

例年であれば、梅雨はすっかり上っている筈である中旬過ぎても雨の日が多く、月末近くの27日にやっと目附谷の右岸に天幕を張ることができた。

翌日からの行動は夜明けと共に決めて、8時前に寝袋にもぐり込む。

聞いた様な声をする。今日下って来た“ナルダニ”の奥で一羽鳴いている。“ブッポウソウとしか聞えないよ”と頑張る御仁もいたが、

兎に角コノハヅクの声である。

“はくさん”に“老年期に入って、何時の日か”とはやまった事を書いたものと反省もしたが、それよりも嬉しく懐かしかった。

もう少し近くに來ないかと思ったが、その日は動かなかつた。やがて鳴き止んだ。

翌日からの天気は、午前中は何とか保つたが、午後は雨になつて、28日、29日、30日の夜は雨となり、コノハヅクの声は聞かれなかつた。

31日になつて、やっと夜も雨が降らず8時頃に一寸鳴いた。外は月明りのようなので、天幕から出て見ると十三夜月位で明るい。これで鳴かないのか。

8月1日、2日も遠くで鳴いたが、月の出と共に鳴き止む様である。

3日の夜は、今までより随分近く、“ナルダニ”との合流点付近で鳴いている。外に出て見ると東方のブナ林の稜線が異常に明るい。満月である。コノハヅクのいる谷筋は今、月の光を浴びようとしている。月の光が届くと鳴き止んだ。やがて、こちらの谷底にも光がさして來た。この明るさではコノハヅクの眼もくらむのであろう。

独り残つた目附谷、動物達もその気配を感じずのか、電灯で明るい天幕の中にハツカネズミ位の小動物がやつて來る。南京豆を四つに割つてガムテープの上に載せて、捕獲を試み、明るいと駄目であろうと、電灯を消すと見事にやられて終つた。

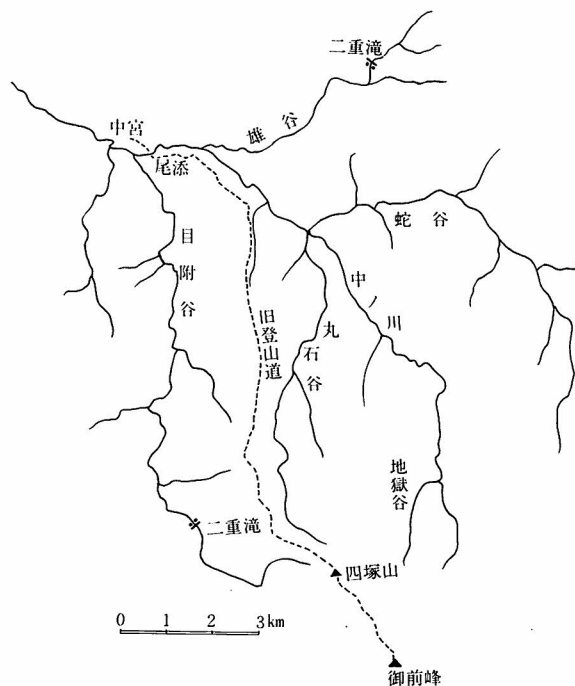
処で、4日は十六夜月、コノハヅクが慰問に來て呉れたのかと思つて程近くで鳴く。月はやつと山の端を出切つた処で、新聞が続める位明るいのに、今日は良く鳴く。対岸のブナ林の中である。月の光が冴えてくるのに従つて、流れの音までが、何にかを歌つている様である(ローレライの歌声もこれか?)。この歌声もブッポウソウと響く間はハタと止む。

詩情があればこの感激をと、妙な事に氣をとられている間に鳴き止んだ。

5日夜は人が増えて、天幕内が人声で賑やかになると、小動物は天幕内に入らず、コノハヅクの声も遠退いた。月の出が遅くなつているのに聞えない日もあつて、10日夜からはすっかり聞かれなくなつた。11日夜などは、痔の痛みで寝袋の中を反転・悶々としているのに慰めては呉れなかつたのである。

それでは十六夜月の夜は、何の為に近くに來たのかと思つた。天幕の廻りをウロツク小動物を狙つたのか、下衆の勘繰りもいい処かもしれないが、コノハヅクが生きる手段としては止むを得まい。日中は、これ等小動物を狙つている蛇の姿を天幕近くで見かける様になつていたのである。

それにしてもコノハヅクの声は何時聞いてもすがすがしい。来年もまた聞かして貰うつもりである。(金沢大学教養部地学教室)



白山の民話 (2)

め っこ だに ばけ もの 目 附 谷 の 化 物

石 野 春 夫



(イラスト 石川 太郎)

むかし、むかし、白山は^{にょにんきんせい}女人禁制と言って女の人は登ってはいけないことになっていました。あるとき尾添のきかんおばばが村の人達が止めるのもきかないで、登ってはならない白山の頂上をめざして登って行きました。白山の神様はこのおばばが神様の住んでいる頂上を目ざして登って来るのを見つけて大へん腹をお立てになりました、神様は頂上近くまで来たおばばをひつつかんで真っ二つに引きさいておばばが履^はいているワラジをむしり

取つて、はだしのおばばの体の半分を^{げかい}下界に向つて右側の谷へほおりこんでおしまいになりました、残りの半分以上を左側の谷へほおりこんでおしまいになりました。右側の谷は^{じやだに}蛇谷と言つて大きなヘビが沢山住んでいる谷です、この蛇谷へほおりこまれたおばばの体の半分は沢山いるヘビがきれいに食べてしまいました。左側の谷へほおりこまれた残りの半分のおばばの体は、片目、片手、片足で、口も鼻も半分のお化けに

なつて誰か助けに来てくれないかと、はだしの片足で広く深い谷の中をさまよい歩くようになりました。尾添の人達はいつまでたつてもおばばが帰って来ないので心配になりましたが誰一人として探しに行きませんでした。

あるとき一人の男の人がこの谷の奥へ仕事に行きました、途中迄行くと突然、片目、片手、片足の^{ばけもん}化物が出て来てはだしの片足で、ヒョッコ・ヒョッコと追いかけて来ました。

谷の中を誰か助けに来てくれないかと待つ

ていたおばばの化物です、おばばの化物はこの男の人に尾添返つれて行つてもらって、もう片一方の体を見つけてもらって、くっつけてもらおうと思うたのです、自分の体の半分がへびに食われてしまったことを知らないのです。何とかして男につかまろうとしてはだしの片足で一生懸命、ヒョッコ、ヒョッコ、ヒョッコ、ヒョッコと追いかけました。男はつかまったら殺されると思い恐ろしさで足ががくがくして思うように走れません。もう少しでつかまりそうになったとき、男は自分の片足のワラジの紐がゆるんできていたのを力一ぱい化物にけとばしてぶっつけました。

ワラジがとんで来たので化物は喜んで男を追っかけるのを忘れて、そのワラジをひろって履こうとしました。片手で片足にワラジをあてて紐をむすぼうとするのですけれども、どうしても片手ではワラジの紐はむすぶこと

ができません、右の紐をしめると左の紐がゆるみ、左の紐をひっぱれば右の方の紐がほどけていきます、何とかしてワラジを履こうと、くんず、ねんずしておりました。男は化物がワラジの紐をむすぶのに一生懸命になっている間に村へ逃げ帰って来てしまいました。

この時から、この片目、片手、片足の化物がいるこの谷をメツコ谷と呼ぶようになりました。片目で片手で片足にワラジをはこうとするこの化物は、今でもこの谷の中を助けに来てくれる人を求めて、さまよっているということです。

今でも、尾添の人達はこの谷へ入る時にはいつでも片一方のワラジをぬいで、この化物にぶっつけることができるように用心して行くそうですし、この化物に出合ったらワラジを片一方ぶっつけるように子供に教えているそうです。

《語り手は川田富美子氏です》
(現鶴来町在住)

◆◆◆◆◆ 編者注 ◆◆◆◆◆

尾口村瀬戸の粕塚（現在開墾記念碑が立っている）のそばで酒粕を売っていたおばあさんがいた。白山へ持って行けば登山者によく売れるだろうと四塚山へ持って行った。女人禁制の山へ酒粕を持って来て金もうけしようとはとんでもないと、神様がばあさんをひき裂いて、片方を目附谷の二重滝へ、片方を雄谷の二重滝へ投げ込んだ。このばあさんが化けて出るので、雄谷へイワナ採りに行く時は

ワラジを余分に片方持って行くように。その化物が出たらワラジを片方やって、それをはこうともたもたしている間に逃げて帰るとよい。

というふうに、やや形をかえて吉野谷村中宮でも語り伝えられている。ともに白山への女人登山を戒めると同時に滝が多く深い白山の谷へ入る時には十分の準備と注意をするようにと説いた話である。

◆◆◆◆◆

「木の実」のイメージ

松山利夫

私達はいま、「木の実」という言葉を聞いたとしましょう。そのとき、この3つの文字からあなたはどんなことを連想するでしょう。

かつて私は、こうした意味のアンケートを約200人の方々にお願ひしたことがあります。御協力いただいたのは、白山の麓の白峰村白峰中学校と金沢市の中心部に位置する高岡中学校の生徒のみなさん、それに御父兄の方々でした。

その結果、たいへん興味のあるいくつかのことが明らかになりました。その1つは、「木の実」と聞くとすぐに「ドングリ」を思い出す人が、白峰でも金沢でも大変に多かったことです。いまの私達にとって一番身近な木の実は、以外にも簡単には食べられないドングリだったのです（もっとも、いろいろ手を加えればたいへんのドングリは食べることができます）。そういえば、幼い頃の一番よいおもちゃ（玩具）が、このドングリだった人も多いと思います。

秋、落葉の下にあるのを拾い集つめ、糸でつないで輪をつくり、女の子は首かざりや腕輪にして遊んだり、またママゴトにも使いました。女の子もそうですがおもに男の子は、ドングリに竹ヒゴやつまようじなどを刺してコマをつくりました。「ドングリコマ」の作り方には、竹ヒゴを刺すだけの簡単なものや、ドングリの実のほぼまんなかを横に切り、別に適当な大きさに切っておいた紙の円盤にそれぞれの好みの模様をつけ、これを半切したドングリにのせ竹ヒゴなどで刺し通すもの

もありました。これらのほかには、「ドングリのフエ」があります。これは実に小さい穴をあけ、そこから白い中味（胚）を針でとり出してつくったものです。

先のアンケートは、こうした思い出をもつ人達が数多いことを示しているものと思います。

私の注意をひいたアンケートの結果の2つめは、「木の実」と聞くと「第二次大戦中や大戦直後の食糧が乏しかった頃を思い出す」と答えた人が、白峰にも金沢にもみられることです。もちろん、こう答えた人達はいずれも40代以上の方ばかりです。もう少し詳しく書いてくれた人もありました。そのおもなものを2つほどひろってみますと、「大戦直後の食糧がなかったとき、県庁の庭のシノミをよく拾いにいった」ことや、「食べるものがなく、トチノミやドングリをほとんど常食のようにしていた」ことなどがあります。食べ物がふんだんにある現在では、トチノミやドングリを常食にし、シノミを拾っておやつのかわ



りにしたことなどは、ちょっと考えられないことかも知れません。しかし当時は、そうしなければならなかったほど食糧事情は深刻だったようです。

このように、小さな木の実にもその時代の社会情勢が反映されていることを知るのです。

それからもう1つ気がついたことは、白峰でも金沢でも、中学生が“知っている”か“自分で拾ったことのある”木の実の種類がほとんど共通していることです。それはドングリ・クリ・クルミなどですが、山村の子達と中都市に住む子供達の間にも明瞭な差がなかったことです。このことは、山村とはいっても実際の生活や遊びが全く都会とかわらないところからくるのかも知れません。ただトチノミだけは、金沢の子供達は知らないようです。そういう点ではトチノミはやや特殊な木の実になっています。白峰の子供達がこの木の実

を知っているのには理由があります。この村では昔から今にいたるまで、複雑な工程を経て“トチモチ”に加工し、食用に供してきているという事実があるからです。つまり、こうしたことを通じて10代の子供達もトチノミを知り、その食べ方の一部なりとも継承していきだろろうと思われるからです。

ドングリはこうはいかなかったようで、私達のほとんどは幼い頃の遊びの思い出につながるものでしかないようです。大戦直後まで食用に供されていましたが、いまでは食べるということは思いもよらず、それどころか“ドングリを食べるとドモリになる”とさえいつてきたわけです。

このように、地域がかわり時代が推移すると、同じ「木の実」でもそれがもつ意味、あるいはそれに対して抱く人々のイメージも大きく変化していくようです。（研究普及課）



鈴なりになったトチの実

たより

- 中宮温泉の白山自然保護センターの蛇谷をはさんで川向いに、環境庁の補助を得て休憩園地を造成しました。吊橋を渡ると、芝生の広場と木造の休憩小屋があります。植樹などのセンター玄関前の整備工事にも着手しました。現在センター周辺は道路改良が進んでいて、大型土木機械がうなりを上げていますが、紅葉の頃までには静かで落ついた白山国立公園内にふさわしいセンター周辺になるでしょう。
- 今年2月と7月に蛇谷周辺のニホンザルの取材に訪れていた岩波映画より、フィルムが2本寄贈されました。「ニホンザル豪雪と闘う」と「夏山、子猿の冒険」でともにカラー25分。東京、大阪方面ではテレビ放送されましたが、北陸地方では未公開です。子供向けの理解しやすい編集で、大変よくできています。
- 立山のライチョウを白山へ移殖してはどうかという話が出て、8月から、当センター、環境庁、富山県などが協力して技術的に可能かどうかの調査を始めました。この調査は来年まで続きますが、人間の手で白山へライチョウを呼びもどすことが良いのかどうかは、我々県民全体が考えなければいけない問題として残されています。意見をお寄せ下さい。
- 9月18日より、尾口局の電話自動化により白山自然保護センターの電話が変更になりました。(電話 新番号 076196—7111)

目 次

目附谷上流での化石採集	2
目附谷の“二重ノ滝”	松尾 秀邦…3
目附谷の声のブッポウソウ	松尾 秀邦…4
白山の民話(2) 目附谷の化物	石野 春夫…6
木の実のイメージ	松山 利夫…8
黒ボコ岩 —パン皮状火山弾—	東野外志男…10
自然公園指導員紹介—下家智見さん—	11
山 日 記	11

はくさん 第3巻 第2号

発行日 1975年10月20日
発行所 石川県白山自然保護センター
石川県吉野谷村中宮
印刷所 株式会社 橋本確文堂